

字音といふもの

高田 友

字音とは漢字の音讀みの謂ひなり。

六世紀・七世紀に散發的に本朝に入り來たりし字音を《吳音》と稱し、後來遣唐使に據りて齎されたる體系的なる字音を《漢音》と言ふ。

《吳音》は佛教と共に傳來したりしかば、佛教用語は《吳音》を用ゐるの段多し。「久遠」を「くをん」と讀むはその一例にて、「久」は「く」が吳音、「きう」が漢音。「遠」は「をん」が吳音、「ゑん」が漢音なり。「權(ごん)」、「吉(きち)」、「繪(ゑ)」、「外(げ)」、「正(しやう)」、「京(きやう)」、「男(なん)」など、みな《吳音》。ただし、《吳音》を持つ漢字はさほど多きにはあらず、大半の漢字は《漢音》を有するのみ。あるいは漢音と吳音と同じ讀みなり。

當初は吳音の方優勢なれども、平安初期に「漢字の讀みは能ふかぎり漢音を用ゐるべし」との布令出でて、朝廷にても吳音を認めずなりぬれば、つひに吳音はわづかに佛教用語として残り、漢音いはば「公用語」として世を席捲するに至る。

吳音も漢音も同じ唐土なれど、時代・地域の若干隔たりたるの憾みあり。《漢音》は隋唐の長安・洛陽の發音に準據すれども、《吳音》は南方音の百濟を經由して到來したりと察せらる。

本朝に漢字を齎したる砌の長安・洛陽にての發音を「隋唐音」もしくは「中古音」と言ふ。而して、《吳音》は長安洛陽の音にはあらねども、《漢音》とともにその唐土にても發音を「隋唐音」と呼稱するが常なり。君、吃驚するなかれ、今にして、當時の唐土にての發音に遡及するを得んとは。しかも、推定音にあらず、正確なる音を再現するを得るなり。唐土に「反切(法)」なる發音表記の傳統あり。而して、この音を現代のピンインに合はせて、アルファベット表記する慣行も確立せられてあり。ただし、日本語のラ行音に相當する子音は現代中國語にては「(エル)なるに、隋唐音にては「(アール)にて表記す。怕るらくは音價に若干の相違あるに由りてならん。

半切の一例を擧ぐれば、「唐徒郎切」と記す。『唐』は『徒』と『郎』の『切』なり」との義なり。「切」は本「反」にして、「唐徒郎反」と書きたれど、「反」の「叛」に通ずるを忌みて「切」と改めた。そもそも「反」は「翻」にして、「言ひ換へ」の意なり。唐を言ひ換ふれば、「徒」と「郎」の合なりと言はんと欲したるらん。

アルファベット表記にて隋唐音を表せば、「唐(tang)」「徒(to)」「郎(rang)」なり。「唐」は「徒」の子音tと「郎」の母音angを合はせるtangの音なりとの由。

特に隋唐時代には、主たる漢字は反切による音の記録の残りたれば、今なほ容易にその音を再現して、アルファベットにて表記するを得。

この音を本朝の人聞きて、假名を以て表記したるが「字音」なり。

「卒」の隋唐音は sot なり。これを字音にて、「そつ」と受けたるは至極理に合ひてあり。「白」は pak なり。これを本朝の人は「パク」と聞きて、「はく」なる字音にて表したり。奈良末期に到るまでは、日本語のハ行子音は h にも f にもあらず p なりしかばなり。

日本語の音節は **u** を例外とすれば、ことごとく母音にて終はる。然則 sot, pak の如く、子音に

て終はる音を發音するを得ず。これによりて、尤も弱き子音 *n* を附して、*soŋ*、*paku* と受け取りたるなり。

「唐」の隋唐音 *tang* の *ang* も本朝の人には倣まねぶこと難かりき。耳慣れぬ我らが先祖には、*ang* は *au* と聞えたり。於是乎こゝに於て、「唐」の *tang* なるは *tau* と聞え、これを「たう」とは表記したりき。時とともに、日本語の發音類廢し、*au* は *o* (*o* の長母音) と化す。これによりて、「たう」は「とう」となりて、如今じよこんの亡國現代假名遣に到る。已哉やんぬるかな。

用語の命名法に統一性なく、混亂を生ずるの怨みあれど、隋唐音に《漢音》と《吳音》あり。隋唐音の中の、地域・時代によりて若干の揺れありしを《漢音》《吳音》とは名付けたるなり。

「法」の隋唐音は《漢音》にては *pap*、《吳音》にては *pop* なりき。これをしも、本朝にては「はふ」「ほふ」と受けたり。本朝にての發音は「はふ」は *papu* ↓ *fatu* ↓ *tau* ↓ *hau* ↓ *ho* と轉じて「ほう」と表記せらるるに至る。「ほふ」は *popu* ↓ *fofu* ↓ *fou* ↓ *hou* ↓ *ho* と變り、畢竟「はふ」と同じく「ほう」とこそは墮したりけれ。

然れども、その發音の差異の痕跡は様々なる漢語に残滓を留む。「ほふ」は《吳音》なれば、佛敎用語に多し。試みに「法親王 (ホッシンノウ)」と「法度 (ハット)」とを比較せん。「法親王」は佛敎用語なれば、「ほふ」の轉じて「ホツ」となれど、「法度」はきにあらねば、「はふ」の轉じて「ハツ」となりて令和の世に及べり。

さて、「三位一體」は「さんみいったい」と讀む。何故に「位」の「み」になりたりや、篤と思案せられたし。「三」は現代中國語のピンインには *san* なれど、隋唐音にては *san* なりき。これによりて、奈良・平安の人々は「さむ」と表記し、眞に *san* とぞ發音せる。豈あた圖らんや、日本人は *o* の外に、*u* もまた子音のみにて發音するを得たりき。平安初期に到るまで、「ん」には *no* と *uo* との雙方の存したるなり。り。

「三」の *san* なるによりて、「位」の *ui*、前の *u* と合して、*mi* の音を作りたるなり。これを連聲れんじやうと言ふ。ただ、「位」の隋唐音は *ui* (*wi*)。間に *w* を挟みたるがゆゑに連聲を起すは難かるべしと思へど、あるいは、後世に「位」の *wi* より *ui* に變りての後に、連聲を起したるにあらざや。

「银杏」を考察せん。「銀」は「ぎん」。「杏」は漢音「こう」、吳音「ぎやう」、慣用音「きやう」さらには後世に入り來たる「あん」なる《唐音》あり。「いちやう」の木を指すには慣用音を用ゐて、「ぎんきやう」と呼べるあり。然れども、「いちやう」の實みの義なる時には、唐音にて「ぎんあん」。 *gin-an* なれど、連聲に據りて *no* と *a* の合して *na* の音生じ、「ぎんなん」とこそは化したりけれ。

また、通常の字音にては、「水」「追」「唯」は「すゐ」「つゐ」「ゆゐ」と表記すれども、平安初期には、「すゐ」「つゐ」「ゆゐ」なりき。「水」は日本語の發音をローマ字にて表記致せば *mi*。 *n* は *w* に近きがゆゑに、*ei* を「ゐ」と受け取りて、「すゐ」なる字音の確立せられたり。然れども、これが隋唐音は *soi* なり。そもそも *wi* なる音の存せざれば、「ゐ」にあらで「い」を用ゐるべし。さはさりながら、「そゐ」としては、邦人の發音との乖離甚だしきを以て、「すゐ」と書くに至る。平安初期には「すゐ」にあらざ。「すゐ」なりき。

此の如く、字音假名遣に二つの系統あり。一は、戦前に流布せし、いはゆる歴史的假名遣（舊假名遣）にして、江戸時代に本居宣長の研究によりて、確定せらる。

今一つは、右に述べたる「隋唐音に忠實なる字音」なり。

「隋唐音に忠實なる字音」は戦後俄かに研究の進みたるがゆゑに、未だ此の二つの字音を特定する便宜なる名稱の存在せず。茲にそれがしの提案するに、戦前用ゐられたる方を「宣長假名遣」、隋唐音に忠實なるを「隋唐音假名遣」とするは如何なりや。假名にて表記する「隋唐音假名遣」（本朝にての音）とアルファベット表記の「隋唐音」（唐土にての音）の混同を避けんと欲すれば、後者を「隋唐音ピンイン」と名付くるも可なり。

歴史的假名遣の復活を唱へたりとも、大方は百年河清を俟つが如しと嗤詆せらるべし。

ああ、澆季なるかな。我が文化の根幹たる國語の大事なり。現代假名遣は發音記号の類にして假名遣と呼ぶに足らず。早晚これを廢止して覆水を盆に戻すの壮志を全うすべし。その日に備へて、「宣長字音」と「隋唐音字音」と、いづれを是とせんやを決するは格別、少なくとも、その原理を學ばずして、何條縁由儂き異國の言語に沈淪せんとはする。

（令和元年十一月十五日受附）